

AH! OKURIKU

第25号



左上：ロンドンの街並

右上：小管神社奥社本殿とその雪囲い

左下：まち中の小さな楽校

右下：糸魚川の煉瓦機関庫

支部ニュース「AH!」の第25号をお届けいたします。

設計雑感

読書の秋を迎え、福井県立図書館を訪ねてみました。近年北陸に建った新しい図書館で、一度訪ねてみたいと思っていました。まず感想から述べますと、「図書館ってこれでいいのかな？」と言う疑問が湧いてきました。とてもきれいな建物です。広々としていて、ガラスを通して見える庭の緑もとてもきれいです。でも図書館に来ている気がしない。何故かと少し考えると、本棚に並べられた本に魅力を感じないのです。一冊一冊の「本」が大事にされて、敬意が払われていると感じない。今の時代、沢山の出版物が発行されますから、単なる情報なのかも知れません。次の世代に伝える宝物ではなく消耗品なのかも知れない。でも、それが求める本との出会いなのか？ と考えさせられます。

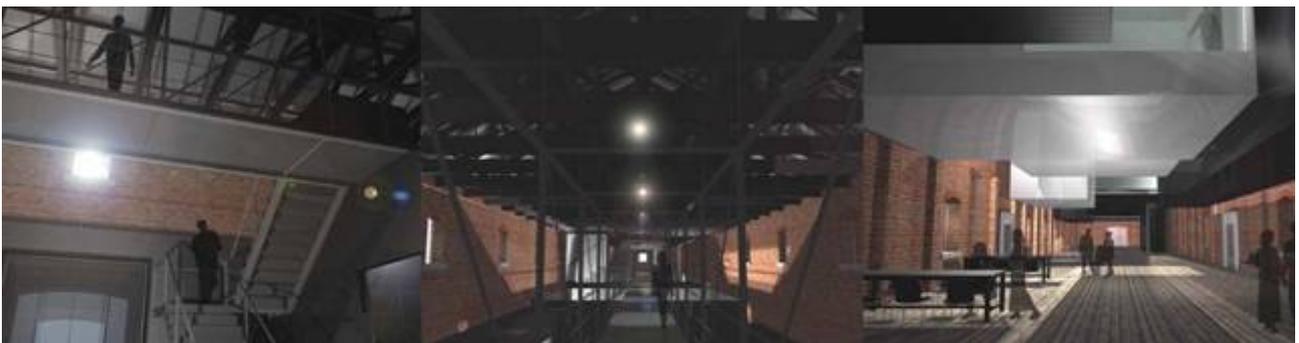
図書館と言えば、アスプルンドの設計したストックホルム市立図書館、アアルトのロヴァニエミ図書館、カーンのフィリップ・エクセター・アカデミー図書館を思い起こします。かなり個人的な好みで選んでいますが、これらの図書館を訪ねると本達に迎えられたという喜びに満たされます。建築家が誰かなんてことは忘れて、分からない外国語の文字で書かれていても手にとって眺めたくくなります。今まで知らなかったものに出会えそうな期待に溢れていま

す。カーンは「本は暗いところから取り出して、明るいところで読む」と言い、アスプルンドは図書館を「知られたものと知られないもの、理性と本能を内蔵する精神の比喩」と考えています。設計へのアプローチに違いはあるにせよ、すべては一冊の本に出会うために建築が在るように思えます。

福井県立図書館は今を代表する建築といえるでしょう。スチールの方立てと大きなFIXガラス、光が均質に差し込む明るい内部、全体が見渡せる高い天井、さらに建物を取りまくデッキテラス。これらのモチーフが相応しい空間もあるでしょう。しかし、その空間では人やものは白昼にさらされ、「一人一人」の人間、「一つ一つ」のものの内面は深窓に隠されてしまっているように思えます。誰にでも分かって近づきやすいことは、本当に分かって出会えることとは違うでしょう。これからの建築には両面が求められています。空間の質と人やものの内面との関わりについて再び問い直されなければならないのではないのでしょうか。

追記：設計者というのは、人の作品をつい批判的に見てしまう因果な職業だとつくづく思っています。

谷重義行＋建築像景研究室
谷重義行



文化倉庫ー赤煉瓦倉庫再利用計画（金沢工業大学 宮下研究室）

「まち中の小さな楽校」

現在、福井大学の南東に 0.37ha ほどの小さな雑木林がある。その隣の小さな抜け道をたくさんの人が通り抜ける。まるで、“トトロ道”のようである。セミや鳥たちが涼しげに鳴く。ここを通る時は、まるで別世界にいるような気にさえなえる。

しかし、先日、親水公園として整えられるという計画を耳にした。福井市は郊外には山があり田んぼがあり、自然豊かな環境が整っている。しかし、市街地にはまとまったみどりがない。区画整理で出来た公園はたくさんあるが、歩いて行ける距離にあるまち中の「身近な自然」はとても貴重である。雑木林の現状はというと、うっそうとしている所もあり、ちょっとでも入ろうものなら服の上から蚊に刺されてしまう始末。とても人が入れる状況ではない。

どうにかして、このまち中の小さな自然を活かすことはできないだろうか。その想いに賛同した学生が今動き出そうとしている。



そのため、雑木林がもっと地域に開かれた土地、もっと地域の住民・学校にとって親しまれる空間になればいいと願っている。地域の人々が親しみを持つようになれば、その雑木林は快適に保たれるのではないだろうか。

そこで私たちは、小学校・中学校・大学を含む地域の人々が参加できるイベントの可能性を探っている。雑木林の良さに気付くきっかけになるようなイベントを行い、できれば翌年も翌々年も続いたらいいな、そんな理想を抱いている。

ご意見・アドバイス、募集中！！

「大きなまちの小さな森を考える会」竹原育美
E-mail ; zatumokurin2003@yahoo.co.jp



モダニズム建築から学ぶ

この秋、ここ富山で『「文化遺産としてのモダニズム建築展」DOCOMOMO 20 選 in 高岡』を高岡市美術館で開催することとなった。この建築展は日本建築学会の富山支所で活動するようになった2年ほど前から、ずっと考えていたものである。

DOCOMOMO とはオランダに本部を置く「近代建築の保存と調査のための国際組織-Documentation and Conservation of buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement-」のことであり、世界各国に現存するモダニズム建築を再検証し再評価する運動を行っている。日本に於いては日本建築学会が 1989 年にワーキンググループを設け、選定活動を行ってきた。これまでに 1920 年代から 60 年代までの日本のモダニズム建築を代表する秀作 20 件が選ばれ、2000 年の神奈川県近代建築美術館を始めとして、高崎や関西、北九州など各地でその展覧会が開催されてきている。

この展覧会を富山で開催したいと考えたのは、現在残されているモダニズム建築から何かを読みとり、次の時代へと残していく大切さ強く感じたからであり、ぜひ多くの人に見てもらおうチャンスを作りたいと思ったからである。

いま、モダニズムが再評価されてきてはいるが、広く認知され保存活動が活発である明治、大正時代の煉瓦づくりの建築などとは違い、モダニズム建築は議論される時間も用意されないままに取り壊されていくことが多い。

しかし、現代建築の基礎ともいえるモダニズム建築には建築家たちが理念を持って建築を作り上げようとした過程や意気込み、またその力強い空間は圧倒的な迫力があり学ぶことが多い。

今また DOCOMOMO JAPAN は 100 選の選定作業が終わり、近く公開されることになっている。20 選には入らなかったが富山からは山口文象の黒部第 2 発電所（1936 年）が選ばれた。

この展覧会によってモダニズム建築に対する見方や今後の建築・都市美のあり方などを考える機会になればと思う。展覧会を開催するにあたって、ご協力を頂いた方々に感謝するとともに、これからも富山からメッセージを発信していきたい。

高岡短期大学 玉井 泰子

小菅だより

昨年公開された映画「阿弥陀堂だより」の舞台として、小菅という名を聞いたことのある方もいるでしょう。

小菅はわずか70数戸の小さな集落ではありますが、古来より戸隠、飯縄と並び北信三大霊場と称せられ、多くの人々の信仰を集めた小菅神社が鎮座しています。その名残として例大祭「柱松柴燈神事」を現在に残し、歴史の深さを感じることができます。

この小菅地域を史跡に指定しようという動きから文化庁の指導のもとに総合調査が行われ、7月より建築分野の調査を行わせていただいております。この度、調査の一環として11月8日に行われた小菅神社奥社本殿の雪囲いを取材させていただきました。奥社本殿は「柱松柴燈神事」の前日、参籠が行われる場所です。奥社の雪囲いに向かうは小菅神社の氏子総代の方々5名。午前8時に出発し、一時間ほど参道を登り9時に奥社に到着。一休憩を挟みわずか一時間余りで雪囲いを終えてしまいました。共に作業させていただきましたが、氏子の方々の熟れた本気の作業の素早さについていけません。この雪囲いをやらなければ一冬で建物は

負けてしまうといます。「柱松柴燈神事」を行う上で、また小菅の心の支柱としてもこの雪囲いは欠かせないものなのです。

小菅の方たちとの関わりから、自分たちにとって大切なものは何か、それを維持していくためにどうすればいいのか、という無言の問い掛けを受けます。地域の人々が地域の大切なものを感じ、自らの手で管理していく。人と自然と構築物の原風景という実感が小菅にはあるような気がしてなりません。

11月24、25日には秋祭りや小菅神社里社、社務所の雪囲いも行われます。

信州大学 梅干野成央、山口智子、岡本茂



(写真) 小菅神社奥社本殿とその雪囲い



「民家の再生はすべて実測から始まります。そのなかで私達はその民家の歴史を読み取っていきます。屋根裏に入り、ススまみれになり、歴史を肌で感じます。それらをもとに、民家の骨格である軸組模型を制作していきましょう。」

梶田雄樹 (信州大学3年)

糸魚川の赤煉瓦機関庫

JR糸魚川駅の構内に大正元年に建てられた純煉瓦造の機関車車庫があります。本屋間口16m奥行き45m(720㎡)の本屋に間口4.5m奥行き35m(157㎡)の付室が付いた軒高5.5mの純煉瓦造の現役で使われている車輛研修庫です。

この車庫は、地元の煉瓦工場で焼かれた煉瓦を使って建てられたものであり、既に92年を経っていますが、風雪に耐え新潟地震やあまたの時間を経てなお驚くほど立派な偉容を誇っています。また「国内に現存する煉瓦造機関庫は10ヶ所に満たない中で、煉瓦造で矩形平面の3線機関車庫は唯一の現存例ではないか」(国立科学博物館理工学研究部 久保田稔男先生)とされています。



この煉瓦車庫が北陸新幹線糸魚川駅工事に伴い、支障物として取り壊される予定であることを知るところとなり、地域のまちづくりにとって恰好の素材ではないかとの思いから、何とか救い出すことができないか、糸魚川市新幹線整備促進まちづくり協議会の中のまちづくり部会で検討会等をやりながら活動してきました。しかしいっこうに見通しが立たないため、

本年7月11日に同志と共に「糸魚川レンガ車庫保存・活用研究会」を設立し、同7月16日に正式に糸魚川市に対して保存活用の要望をしたところです。

また8月21日には長岡造形大学の平山育男先生を講師に「レンガ車庫保存・活用勉強会と設立総会」を行いました。平山先生は講演の中で、なぜ歴史的建造物を残すのかということに対して「皆さんが納得できるなら残していける」ということ。それには「地域のために、よりよく使われる」ということがキーポイントになること。またなによりも「歴史的建造物のような過去を物語るモノたち・歴史を雄弁に語るものたちが、よりリアリティある形でまちの歴史を伝えていける」ということも述べられました。

また「どのようにして残すのか」というところでは「曳家」の例を挙げて説明いただき、「どのように使うのか」というところでは「登録文化財制度」についてご説明いただきました。

現在レンガ車庫保存・活用研究会の会員は250名ほどに広がり、やっこの問題に光を照らすところとなりましたが、もっと市民に広く・行政に深く理解される必要性を痛感しています。保存・活用の技術的・財政的・発想上の課題もまだまだ深めて行かなければならないと思いながら、残された時間的制約に苦しみつつ、幾つもの課題に対する取り組みを同時進行させています。



シリーズ隠された建築紹介

諸法山菅谷寺本坊の改築工事について

新潟県新発田市菅谷（すがたに）にある、諸法山菅谷寺（かんこくじ）本坊は、源頼朝の叔父、護念上人の開基による菅谷不動尊の別當として建立されている。

上人は、文治元年（1185年）に菅谷を通られた際に、ここを結縁の霊地と感じ当所に一字を建て、菅谷寺と号した事にはじまり、上人入寂の後、実朝の寄進により七堂伽藍が建立され、護国寺と号したと伝えられる。

建長5年（1253年）の雷火のため伽藍は焼失したが、みたらしの滝のタニシに囲われ、本尊は護られたと伝えられる。

現本坊は、不動尊の本堂再建時の明和七年（1770年）頃に建てられたと伝えられる。この時に寺号も菅谷寺と復し今日に至っている。

二百有余年もの間、風雪に耐えつつ法燈を見守り続けてきたが、老朽化が進み改築することとなり、平成14年正月より現況調査及び設計を開始した。

既存建物は、外部、特に茅屋根の磨耗が著しく見られた他、当初の部分と後の増改築との取合い部に劣化が見られた。軸部は多少の緩みが見られたものの、部材そのものの大きな損傷は

見られなかった。

設計にあたっては、諸法山菅谷寺本坊の文化的な価値を考慮し、建物の基本的な配置を変えず、茶の間、座敷を中心とした範囲の部材は当初の位置に再利用した。但し、将来にわたり住み続けられる建物となる事を基本として、食堂や水周り部分は居住に必要な便益を図る整備を行った。

また、屋根葺き材は茅の確保や維持管理が困難であるため、銅板に葺き替えることとした。但し、将来の茅屋根の復原に備えるため、小屋梁、桁、合掌は再利用し、当初の範囲を残すこととした。

平成14年9月より解体・組立工事に入り、修理においては、既存建物を一旦解体し、RCの基礎を設置した上に、土台を据えなおして軸部を組み立てた。尚、今回の修理においての、新規の主要な部材には「平成十五年修補」の焼印を押した。また、今回の修理に伴いやむをえず解体し、再利用しなかった部材については小屋裏に保管し、後世に確認ができるようにした。

工事は平成15年9月に竣工し、10月26日の落慶法要をむかえる。

(株)グリーンシグマ 山崎 完一
片柳 友



ロンドンの街並

8月にロンドンを訪れた。とても美しい街並だと感じた。ところがよく見れば建物は汚れ、ゴミは至る所に散乱している。日本では見かけない光景である。日本の街は非常に綺麗である。新しいモノが街に溢れている。しかしそれは美しさとは違う。滞在先の知人が夕食後、地区の話し合いに出かけて行った。近所に建築予定の、アパートの外観について住民が集まり議論をする。聞けば、そうやって地区の様々な事を議論の中で決めていくという。”我がコミュニティー”という感覚が健在で、ロンドンの美しい街並みはそのしっかりとした市民意識の中で創られていた。

大森 直紀（福井大学大学院）

いきいき街づくり 「富山」

私が富山県で都市計画家として関わる仕事の中では商店街の不活性な状態を改善しようとする場面が多いです。商店街ですから線上に連なる商店群がつくり出す何かを「いきいき」としたものに変わっていく議論になります。

私達が〇〇商店街と呼ぶとき、一般論かどうかは分かりませんが、ある面的な広がりを持ったものと認識しているように思います。

商店街を「いきいき」させるには、通りを賑やかにしたり綺麗にしたりする事で見えるように見えます。しかし、面として認識されているものを線だけで捕らえて改変しようとするところにストレスがあるように思います。

富山市や高岡市の中央にある商店街やその集合を見つめるとき、いきいきさせようとする取り組みの多くで期待する効果がなかなか見えないのは、「面」の物を「線」だけでコントロールしようとする事に原因があるのかも知れません。

建物などを面的に整備しろと言うものではありません。面として町を考え、センス (sense) を活かし戦略性 (strategy) を持って立地改善に取り組む仕組み (system) を考えるべきだということです。

富山市の商店街では複数の市街地再開発事業が同時に進んでいます。その中で、複数の商店街組織が協力もしくは統合し、面として広がりのある複合商業立地としての環境維持改善に取り組む地域環境改善機構 (仮) (CDC) の運営の可能性について、民間で議論が始まっています。

高岡市では複数のイベントが結びあい、歴史につちかわれた美意識を資源に、面としての立地改善の取り組みを続けています。

町の魅力は、多様な価値観が近接しぶつかりあい、日々新しい価値観が生まれることにあると考えています。そして、その新しい価値観に触れる界面が「街」なのではないでしょうか。富山県各地の方々の熱心な取り組みが、生活に根ざし面として立地を捕らえ線として街を整備する、そのような「いきいき街づくり」を実践しつつあるように思います。

株式会社 あまかね地域開発 柴田 時和

日本建築学会北陸ニュース「AH!」第25号

発行日 2001年11月30日発行

発行 日本建築学会北陸支部広報部会

清水 恵一(新潟) 玉井 泰子(富山)

早見 洋平(長野) 山崎 幹泰(石川)

野嶋 慎二(福井) 菊池 吉信(福井)

事務局 白井 考・瀬口さゆり

〒920-0863 金沢市玉川町15-1、パークサイドビル3F

TEL&FAX 076-220-5566